総持寺五院塔頭伝法庵主大徹宗令の行実と思想

原田弘道

一

後世、峨山下の諸弟子によって開創された寺院は、「総持寺直末三十六門」と呼ばれ、その中で五哲あるいは二十五哲と称せられる優れた弟子達がいる。中でも五哲の一人、総持寺五院の塔頭伝法庵主大徹宗令について、五院制度との関連において、思想行実について若干の考察をするものである。

五院制度そのものの成立の問題については、既にとりあげているので、[1] 小論はその継続的論考である。

また大徹宗令をとりあげるのは、彼が五院制度成立のかくれた立役者だからである。

二

峨山韶碩の法嗣大徹宗令は正慶二（一三三三）年、肥前に生まれた。但し彼の生誕地については二説あって、『日本洞上聯燈録』『日域洞上諸祖伝』は肥前説であり、『本朝高僧伝』『延宝伝燈録』は大隅説である。また没年も応永十五（一四〇八）年正月二五日とするが、普済善救（一三四七―一四〇八）の「祭文」では応永十二（一四〇五）年とする。ここでは宗内伝記に拠り肥前生まれ、応永十二年説に従う。[2]

早歳にして出家し、筑前妙楽寺の無方宗応について受業し、のち総持寺の峨山のもとに参じて了悟した。

『延宝伝燈録』七、『本朝高僧伝』三七には峨山に謁した際の問答として、

山問。鉄牛生レ児時如何。山曰。石女動レ梭枢機密回。山曰。切忌道著。令擬レ開レ口。山打曰。妙唱不レ干レ口。令ニ忽然有レ省後得ニ悟入一。[3]

とある。即ち無相の妙用についての問答であるが、言詮不及の消息を悟って心印を得たとある。

湛元自澄（―一六九九）の『日域洞上諸祖伝』巻之上には、

峨山と宗令との間で交わされた最初の問答は、潙仰宗の芭蕉慧清の

山偶晩参。示衆云。芭蕉禅師曰。儞有挂杖子。我与儞挂杖子。儞無挂杖子。我奪儞挂杖子。諸仁者作麼生会。不依口伝心授。離卻露布葛藤。直下見透可始得。師側聞無措。終夜不交睫。到天明忽然証徹。乃入室通所悟。山徴詰再三。師捷機無礙。山黙首。他日師乞剃度。山為師会諸師。祝髪授具。号大徹名宗令。(4)

と、「芭蕉拄杖」の話についてということになっている。つまりこの公案は有には与え、無には奪うという矛盾を要求しているのであるが、その意味は、有無の相対を超脱したところに絶対の真理があること、実践的には「有」にも捉われず、「無」にも執着せず、有無共に干らざる所を、拄杖に托して示したものである。これに対する見解を呈して認められ、峨山に剃度を乞い、許されて大徹なる号と宗令なる名を与えられたとある。これは『延宝伝燈録』七にも簡単に触れている。

『日本洞上聯燈録』二では、峨山に謁し、先づ風穴延沼（八九六―九七三）の「風穴鉄牛機」（『碧巌録』三八）にも関連した鉄牛の機用についての問答で省あり、ついで「芭蕉拄杖」（『無門関』四四）話で了悟したとある。両話は有無相対を超えた絶対の消息、働きを問題としているので共通しており、『日本洞上聯燈録』二が一番自然に見えるので、一応これに従っておきたい。

さて彼は貞治年間（一三六二―一三六七）に美濃に妙応寺を開創したが、「妙応寺寺伝」によると、今須領主・長江重景の母が鬼に苦しめられているのを「薪尽火滅」の一喝で救ったのが機縁となった、とある。これに似た話として、後に龍雲寺大用宗俊（―一五五二）、八戸城主宗暘が新たに一寺を開創し、彼を二世に迎え、龍雲寺と称したとあるが、その際、

時城南円蔵院裏。亡僧墓碑有妖火。夜夜発焰。州人且怪且怖。一時僧道巫覡多方祈禳。皆不能滅。火勢増烈矣。師聞之薄暮潛往坐墓辺。至夜果見妖焰熾然而起。乃念曰。種種幻化自覚心生。且道。幻尽覚尽時如何。喝一喝曰。薪尽火滅。於此妖火忽然随声而滅。恰如以水救然。一郷喧伝称大希有。(5)（傍点筆者）

といった事が伝えられている。大用宗俊は肥前小城郡の出身であり、郷里の木島溝に庵居（崇福院）しており、龍雲寺も近いとあって、大徹宗令と郷里が近い。「薪尽火滅」の語に両者に何か関係というか、因縁が感ぜられなくもない。これが根拠薄弱だが、大徹の肥前誕生地説をとる一因でもある。

ここに伝えられる「妖火」「鬼」の話は、共通して客観的合理的な情報形態ではなく、極めて抽象的主観的な雰囲気に基く「神秘」の粧いをもった認識及び伝達によって形成され

ていることが理解できるのである。これはまさに中世的な特徴の一つであり、感覚的伝達が重んぜられていたことを意味する。

開創に伴う神秘的な奇蹟譚に比して、その運営について見るに、妙応寺は総持寺同様に輪住制がとられていたようである。極めて合理的である。「妙応寺文書」によると、

青坂妙応寺住持職事

一如二代（宗令）和尚御尊意、檀方寺家同心、而末代可以輪番被住院者也、

一住院之時、檀方之御祝染物一、又一束一本、又正月同之、其外不可有仁義、

一自檀方於住持方、少分不可有仁義、毎住院長老檀方御費不可然也、

一住持於檀方有大慈大悲殊勝之信心、而行道可堅固、

一檀方於寺家有尊重恭敬之信心、即是家門富貴子孫繁昌故也、

仍二代和尚御直弟連判状如件、

応永廿九年壬寅三月九日

立川前住雲勝（義天）（花押）　立川前住宗安（禅室）（花押）

立川前住契養（浩済）（花押）　立川前住立乗（日桂）（花押）

総持当住可肖（不感）（直）（花押）　立川前住祖雲（月江）（応）（花押）

総持前住宗林（大成）（花押）　総持前住元三（普門）（花押）

妙応寺方丈置之[6]

とあって、輪住制がとられていたことが伺がわれる。立川寺についても同様であろう。

立川寺を大徹が開いたのは永和三（一三七七）年であるが、立山信仰をとり込んだ形の開創因縁譚となっている。即ち十八善神と立山神がそれぞれ身をかえて十八人の工匠となり、また樵夫となって、立川寺を建立したというのである。

こういった話は多く伝えられる。例えば彼の法兄の通幻寂霊（一三二二―一三九一）は亡母の墓から生まれたと伝えられ、その伝説の一つは「倩女離魂」（『無門関』第三五則）の例に比すべきドッペルゲンゲル現象的な様相を示している。

其母初無嗣。常詣仏塔。禱生聖者。一昔夢梵僧付金盂有妊。将分娩其母遽亡。父悲慟不已。座古廟之側。祠後行人往来。輒聞廟側有嬰児声。聞及其父。開壙視之。師已誕焉。[7]

更に永沢寺開創に因み、門前の神明社の由緒が伝えられる。即ち「永沢寺開山・通幻禅師が、応安元（一三六八）年、摂津国川辺六瀬村故越前太守平尾の旧宅で法を説いていた月色皎々たる一夜、直衣束帯した白髯の老翁が来て『此地、法を広むるに適せず宜しく此処を去りて西北数里に霊地あり彼処に居りて説法せよ』と言い終って去った。それで禅師は翌朝六瀬を発して当山の麓に来ると昨夜の老翁がまた来て、『該山嶺に欝蒼たる老樹四面を繞した平地があって、中央に清澄なる霊池あり、其の傍に吾れ桝を降し置く、其処に道場

を開くべし』と告げた。禅師は度々の案内を陳謝して『翁は誰なるか』と尋ねると翁は『吾は五十鈴川の神、永く此の山に鎮まる』と言い終って形が見えなくなった。禅師はこの言葉を畏み嶺に登ってみると、果して閑雅の桙があったので、頂き畏みてこの桙を守護神と奉祀し専ら道化を施したので、道風天下に籍甚し、畏くも後円融天皇の叡聞に達し、勅宣によって細川頼之が奉行職となって永沢寺七堂伽藍の建立と共に、初め禅師が五十鈴の翁に遭遇し神託を受けた清流鬱々たる当山の麓に神殿を建立して神明社と称し、『天照大神を奉祀して永沢寺の鎮守とした』と」伝えられている。(8)

三

通幻の永沢寺開創にあたって神明の出現、母が死して後土中より生まれたと伝えられる話、永沢寺における竜女の済度等が伝えられ、また大徹には、先の妙応寺開創の奇蹟譚の他に、立山連峰からは山神が来て夜毎に灯を献じたとされ、また、

春秋七十六。闍維建レ塔。菴曰二師子一。後龍神夜夜捧二燈於塔下一。人咸驚嘆云。(9)

と龍女が北海から現われて灯を献じたと伝えられ、また丹後の慈眼寺開創の際の鬼神のお告げ等共に異僧的霊能者としての能力を備えていたことがわかる。

かかる能力が後に源翁心昭（一三一九―一四〇〇）との確執の一因ともなったことは、総持寺五院制度成立の問題との関連において既に論考を試みているが、(10)五院輪住という本山協力態勢が制度的に完成したのは応安三（一三七〇）年に「峨山門派之衆総持寺住番之事」の聯判状が書かれた時である。

五院制度は中世的な特徴をもった組織であるが、その特質は思想観念を核としている点であり、形態は違っても中世には信仰という形での思想集団が沢山ある。これらの組織は人は替っても組織は存続した。その点では一見、古代の国家や近代の法人に似ているようにも見える。しかし寺院は物財に対する権利を基盤とした法人ではなく、それを構成する人々の共通の思想観念、つまり社会的主観による人間的集団である。だから、寺院は伽藍が焼けても多くの場合再建されるし、寺領や荘園がなくなっても大抵の場合、細々ながらでも存続する。寺院には破産という現象は存在しなかったのである。あったのは僧俗の構成員の継承の有無だけである。

中世においては、社会的主観の共通性が何よりも優先し、物財を基盤とした組織を否定した。しかし峨山下の太源宗真（一三七一）の普蔵院、通幻寂霊の妙高庵、無端祖環（一三八七）の洞川庵、大徹宗令の伝法庵、実峰良秀（一三一八―一四〇五）の如意庵の五院成立は、思想信仰を核としているが、本山の経済基盤の安定確立への配慮がなされた組織運営とな

った点、従来の中世的組織より一歩進んだ合理的なものとなったのである。

総持寺の初期の輪住期間は貞治五（一三六六）年から応安七（一三七四）年までは一年交替で住持が替っているが、これは五院が出揃う四年前から輪住制度がとられていたことを意味すると考えられる。応安七（一三七四）年から至徳元（一三八四）年の九世実峰良秀から、通幻再住、実峰再住、通幻再再住、十世竺堂了源（峨山嗣）までの十年間の三ケ年輪住は不明だが、住持期間が二、三年となっており、明徳元（一三九〇）年以降から三年の期間となり、一巡して一年一期制となった。更に天正十五（一五八七）年以降になると、輪番地から五院の一院へ任期一年を限って住持し、一年を五院が分けて一院の住持が七五日間、総持寺当住として現方丈の座にのぼるように変貌してきた。[11] と同時に文亀元（一五〇一）年頃から、輪住（勅住）と瑞世（一夜住職）の二本立てで行われるようになり、より強固な経済的な支援態勢をととのえていったのである。

「五院任期一年、総持寺当住七十五日」の制度のもとでは夏・冬の九旬安居の結制が行われなくなった。[12] 住持期間が五十日未満となったためである。また新しく五院の当住となった人が次の輪番に当る人に請状を発するようになったが、一年前に請状を発するのは輪住任務に必要な物財を準備させるためである。江戸時代は様式尊重の風潮が強く、この時代を通じて輪住には千両の資金を要したと語り伝えられているのである。[13] 住持職の任務は本山護持のためであって、伽藍の維持、僧衆の供養等その物財を整えることを意味したでのある。

この五院制度成立の立役者として、通幻寂霊と大徹宗令をあげねばならないが、組織者としての合理的精神を持っていたことを見なければならない。臨済宗においても同じ頃、宗峰妙超（一二八二―一三三七）の法嗣徹翁義亨（一二九五―一三六九）が応安元（一三六九）年に「龍宝山大徳禅寺自今以後堅可守護法度条々」（大徳寺法度）を制し、また徳禅寺法度・正法庵法度を設け、住持職以下諸役職の人選方法や任期、特に役職者に対する奉給をはじめ寺院運営や寺領管理などを明確に規定し、運用するようになった。また後に妙心寺の雪江宗深（一四〇八―一四八六）は文明六（一四七四）年から「正法山妙心禅寺米銭納下帳」（日単薄）の妙心寺会計簿を作り、寺院経済管理を厳密に行って、妙心寺が物財の力を蓄える基礎を作っている。

このように一、二例示したのみであるが、臨済宗にも合理的な組織運営がなされるようになり、中世後期の新たな時代精神のあらわれを示しているが、奇蹟と霊異に彩られた僧伝の背後にかくされた真実の姿、即ち合理的側面も見なければ

ならないのである。[14]

即ち通幻と大徹は共に先に示した如く、霊能者としての資質と同時に、組織者として五院の成立運営の中心的役割を果たし、通幻は更に僧録として手腕を発揮し、永沢寺に於ける活埋竅、また同門沙汰、あるいは通幻寂後における五院態勢の確立推進者としての大徹の行動は、客観的合理性に基いた冷厳な組織者、指導者としての一面を明確に示しているのである。

このように矛盾的両面を持っていることは、一言で云えば「カリスマ」である。無論禅的境涯と見解に裏付けられているが、人物が大きく見え、何か得体の知れない迫力があるということだ。[15] 教祖的リーダーといってもよいであろう。

宗教的才能はたいてい文学的才能（表現力）を兼ねる。その逆は必ずしも真ではないが、文学的手腕はむしろ宗教者の必須の条件と云って良いであろう。文学的才能とは、人々にさもありなんと思いこませる魔力のことだ。それはペテン師の手口に通ずる。宗教者の文学的手腕のペテン師との相違は、ある意図をもって他をひっかけるか、意図なしに自からかかって悔いぬかという一点にあるのではないかと思われる。そういう意味ではペテン師の「嘘」と本質的に異なるものである。

確かに「嘘」は相手をだますばかりでなく、自分のためにつく場合の方が多い。空想的なうそをつく人物ほど、実際は極めて現実的な性格をもっている。というのも、嘘は常に現実の中に根拠を持っており、現実に深くとらわれているからで、嘘の内容及びイメージが空想的に見えるだけであって、その目的は深く現実に結びついている。嘘をつくというのは現実を作りかえ、あらまほしき現象にしたいという願望に最も安直に答えるものであるから、不可思議な超常現象も何らかの手段として使われるので、決してそれ自体で独立したものではないということである。

よく嘘は「小説」や「物語」をつくる文学的才能に結びつくように言われるが、一考を要する。それは嘘の中では、その人物は「私は……した」というように、「私」を必ず登場させる。このことは「嘘」が「私」を始めとする「現実」からつねに切り離すことができないということの証しでもある。そしてまた、この点こそ「嘘」が根本的なところで「小説」「物語」とは無縁なものであることを物語っていると云えよう。「小説」や「物語」とは事実や経験から一度離れて、抽象化された思想なり感動なりを伝えようとするものだからである。禅語録も、禅体験即ち即自的な私体験を否定した認識に基づく思想哲学を表現し伝えようとするものである。

したがって通幻や大徹が霊異を示し、霊能力を持っている

というのも、そう人々に思いこませるだけの表現力も含めた総合的な力（カリスマ）を持っていたと考えるべきである。彼ら自身が霊異を殊更に口にし吹聴したり嘘をついた訳ではない。これは通幻の普済善救（一三四七―一四〇八）編録の『通幻寂霊禅師語録』を、大徹の場合は法嗣の竺山得仙（一三四四―一四一三）の『語録』（二巻、守勤編）をはじめ、会下の諸法嗣の僧伝及び関連記事を通じて見れば明白で、極めて実際的な合理精神をもった人格であったのである。

四

大徹は那須の殺生石を済度した石破門徒の祖源翁心昭と同様教祖的人格であった。されば『嶽山史論』では、

その風貌些か異彩を放っておる。奇蹟に富み、伝説に貧しからざるは、阿兄たる源翁法姪たる梅山と相肖たる点あり、顱頂骨の中央著しく隆起して凸字形を為せること、釈尊の肉髻より大なる、その相好の凡ならざる所に、二十人に近き法嗣を吸収して、特に竺山の如き傑物を陶冶するの力余りあるを見る。(16)

と、その異彩ぶりを述べている。しかし源翁のように一切の協調を排して、独りわが道をゆく姿勢をとったのとは対象的に、大徹は峨山下教団に対して、大変協調的であり、むしろ指導的役割を果たしている点では異っているのである。

総持寺には峨山が一流相承すべきことを門流に命じた二通の置文が伝承されている。一つは康安二（一三六二）年二月九日付の「総持寺未来住持職事」で、「仍於二後代之住持職一者(17)於二韶碩法嗣之中一撰二器用仁一而可レ補二住持職一……」ことをうたったものである。もう一通は貞治三（一三六四）年十二月十三日付で、「韶碩門下守二嗣法之次第一五箇寺可二住持一……」(18)ということを示した内容のものである。しかし上の二通の置文で見ると、峨山が五院開創の五法嗣（五哲）にのみ、特に塔頭を開くよう命じたようであるが、峨山が多くの門弟中、太源、通幻・無端・大徹・実峰の五人だけを選ぶような差別扱いをしたとは考えられない。(19)

峨山の二通の置文が出された年について見ると、康安二（一三六二）年、貞治三（一三六四）年は、彼の遷化の三年前と一年前に当る。それは丁度太源の遷化の九年前、七年前に当る。通幻は四〇歳、四二歳の時であり、無端（生年不詳）は遷化の二五年前、二三年前に当る。大徹は二九歳、三一歳であり、実峰は四四歳、四六歳である。

また五人以外の主な人では、無底良韶（一三一三―一三六一）は四九歳、没後三年であり、月泉良印（一三〇九―一四〇〇）は五三歳、五五歳に当る。道叟道愛（―一三七五）は十三年前、十五年前に当り、源翁心昭（一三二六―一三九六）は三六歳、三八歳である。無外円昭（一三一一―一三八一）は五一歳、五三歳の時にあたり、無際純証、無等慧崇、竺源超西等は不明

である。五院の五人の中では一番早く遷化した太源と一番遅い大徹との間では三四年の開きが存するのである。

五院開創に関する聯判状二通が存するが、これは「峨山門派之衆総持寺住番之事」（応安三年、一三七〇）で、「然而以二聯判状一総持寺於二末代一可レ為二洞上之本寺一儀相定者也。」と総持寺を本寺と規定した内容のものと、もう一通は永和四（一三七八）年の「洞谷山住院之事」で「総持東堂位無落居、不可住院、於向後者、総持寺為本寺」と総持寺の前住又は当住が永光寺に赴いた場合の資格ないし待遇を論じたもので、総持寺を永光寺を含む洞上一宗の本寺と定め、総持寺の前住もしくは当住を永光寺の東堂位として尊重恭敬することを要求したものである。

応安三（一三七〇）年の「聯判状」では永平寺・永光寺の西堂位の問題が決着しないのに八年後の永和四（一三七八）年の「聯判状」では永光寺東堂位を要求し、それがかなわなければ峨山門下は永光寺に住院してはならないとしながら、しかし現実には峨山下無等慧崇（十五世、永和二年）、大徹宗令（二十七世）、普済善救（二九世）、瑞巌韶麟（三十世、無端祖環法嗣）、竺山得仙（三十二世、大徹宗令法嗣）等が晋住している。ここにも大徹派が深くかかわっていることが理解できる。又総持寺が急速に勢力を伸張してきたことが分かるのである。そして永平寺に対しても、その実際は不明だが、わずかながらもかかわっていたのである。

通幻寂霊の「喪記」（明徳二年、一三九一、五月一二日付）に「估唱」が行われたことが出ているが、[20]「都計三八貫三三一文」で支出は三項目に分けられ、第一は「一〇貫、永平寺斎粥資」にあてられ、第二は「一〇貫、茶毘資用」、最後は「一八貫三一文。借用常住銭返済」（「把帳事典喪　僉押」）とあり、全体の二六％に当る一〇貫文が永平寺に贈られている。一〇貫は米一〇石に当り、[21]十人分の一年間の食費に相当する高額である。永平寺・総持寺の両寺間に往来があった証拠であり、且つ総持寺の派勢の力を感ぜしめるものがある。通幻下が実際に永平寺に晋住するようになったのは、曇英慧応（一二四一―一五〇四）、器之為璠（一四〇五―一四六八）等の復興運動が行われてからもずっと後になってからである。

さて次に五院に関する二通の聯判状が提出された年の五人の年令を見ると、応安三（一三七〇）年は、太源は遷化の前年、通幻四八歳、無端十七年前、大徹三七歳、実峰五二歳で、永和四（一三七八）年は太源の名が見えないのは当然だが（没後七年経過）、通幻五六歳、無端九年前、大徹四五歳、実峰六〇歳である。五人以外では、その時、無底は五七歳、六五歳、月泉は六一歳、六九歳。道叟五年前、三年前で、源翁四四歳、五二歳、無外は五九歳、六七歳である。

以上、二点について年齢的に見れば、太源を除く四人はほ

ぼ充実した壮年時代のことである以外、特に選ばれなければならない理由は見出し難い。特に嗣法の次第ということになれば、すでに上位五名ということにはならない。もっとも「韶碩門下守二嗣法之次第一五箇寺可二住持一」（「総持寺未来住持事」貞治三年、一三六四、十二月十三日置文）[22]とある文章も、広く門下全体を指しているのではなく、選ばれた五院の五人が嗣法の順序によって晋住するという意味にとれば通る。それは聯判状の署名の順序は嗣法の順序に従っていると考えられる。晋住もそれに従うということであろうか。そう考えられなくもない。しかし実際には、地理的側面から総持寺とは密接な関係を持ち難い人達が入っていないのである。裏返していえば、総持寺周辺に開創寺院を持つ人達によって、五院輪住制という護持体制の確立がなされていったと云ってよいのである。[23]

また五院開創も時期は特定できないにしても、ある一定期間内に成立しなければ、その制度自体が成り立たなくなるし、実際に機能することがなくなってしまうであろう。しかし応安三（一三七〇）年の段階では五院が成立しているのであるから、開創はそれ以前でなければならない。すると峨山滅後わずか六年以内に成立したと考えられる。

この間の動向を大徹に限って見てみると、彼は貞治年間（一三六二―一三六七）に、美濃に妙応寺を開いている。彼の本道場は立川寺で、その活動の中心が越中であるが、妙応寺もこの時点では本道場的性格をもった拠点となった寺院である。その他は「高き史実眼から見れば多くはみな勧請開山」[24]と見られる。すると妙応寺開山数年ならずして伝法庵開創ということになる。少し期間が短かい感じがする。総持寺護持体制への参加を急いで求められたように思える。

彼はこの体制に全面協力的であったので、それ故たえず総持寺にのぼって重要会議に参加し、寺門の興隆に協力している。即ち応安三（一三七〇）年、永和四（一三七八）年の各聯判状に名を連らねているのを別にしても、更に康暦二（一三八〇）年、永徳二（一三八二）年、明徳元（一三九〇）年、応永九（一四〇二）年の各置文に名を連らねていることによって知れる。永和年間（一三七五―一三七八）には第八代の住持として総持寺を董し、至徳二（一三八六）年総持寺に再住し、同年九月二九日には「総持寺法堂造立注文」および「総持寺常住文書新目録」を調製している。[25]

なお法嗣の竺山得仙の『竺山得仙語録』巻二には、大徹は総持寺に三度、永光寺に両度住持したとある。[26]

五

永光寺が輪番制を行ったのは二世の明峰素哲（一二七七―一三五〇）からである。暦応（一三三八―一三四二）のはじめ頃、

永光寺二世一住十四年、瑩山（一二六八―一三二五）示寂の正中二（一三二五）年の晋住で、退院は三世無涯智洪（―一三五一）晋住の暦応二（一三三九）年までで、これは三世無涯、四世峨山の各一年、五世壺庵至簡（―一三四一）は入院後遷化に比較すると十四年は輪住でなかったことを示し、明峰退院を機に輪番制に変ったことを意味するものである。そしてこの制度は、永光寺山内に紹灯庵（明峰開創）・新豊庵（無涯開創）・大雄庵（峨山開創）・宝鏡庵（壺庵開創）が置かれ、一年任期で発足したものである。

従って総持寺の輪住制に先立つこと二七年前のことである。しかし永光寺の輪番制は総持寺に比較して成功したとはいいがたい。それは先に触れた永光・総持の寺格争いがその原因の一つである。応永二二（一四一五）年三月二十八日付の「明峰派峨山派儀絶時管領畠山方訴訟目安」があり、大乗寺から遊作美作入道に宛てたものである。その一節に

上古。太源和尚（普蔵院開山）惣持寺当住之時。就永光寺有出仕。其時帯赤坐具而云。与大乗寺前住。可齊位。自当門下押之間。則懸黒坐具有出仕。中頃光恩寺無等和尚。永光寺住院時。被訴訟旨者。西堂位幷両寺名字。就本寺可被行。則当門下有評議。不被行。其故。異朝如浄和尚之時。於天童。唯一西堂。不被行西堂位。亦日本。於永平寺。八坂海妙西堂幷智照和尚。不被行西堂位。至今。当門下。不被行西堂位。末寺名字就本寺。行事。先規其例。此沙汰於法中雖落居間。能州吉見殿御時。守護代属五井而於永光寺開山塔伝燈院。対訣（決カ）而依理非。可有截許被報処。浄住総持両門下。起先師霊骨。捨塔頭離山。然当門下守本寺。住院二十余年。爰神保肥前入道。依為総持寺派瑞巌和尚弟子。不及已前所望西堂位名字沙汰。浄住総持之前住。就永光寺。立東堂位。仍加州之明峰派儀絶。而停止出仕。能州之当門下。雖不可立逢。神保守護代。而以権威。没倒寺院。可押檀那所領由発言之間。暫失本意。立逢者也。（異本有右之趣御憐察仍訴訟如件）

（異本有次文。）

応永廿二年三月二十八日　　大乗寺現住　判

遊作美作入道殿

（一本致作渡）

自畠山致返報

自加州大乗寺。御申候。四門跡寺次第。幷東堂位事。大乗寺方訴訟為理運至極之上者。至当国永光寺者可打渡明峰門下之状如件。[27]

応永廿二年四月五日。　　在判

遊作美作入道殿[28]

と、これによると太祖親撰の「永光寺尽未来際置文」「山僧遺蹟寺々置文」について全く言及する所がない。太源宗真や

無等恵崇は西堂位を求めており、後に東堂位を求めることに対して、不当であることを主張しているが、迫力に欠ける。事実、明峰の法嗣松岸旨淵（一一三六三）、祇陀大智（一二九〇―一三六六）、珠巌道珍（一一二八七）、月鑑虚焞、館開僧生、主路続玄、龍松泰渓、月菴晄瑛（一一三四五）、宝応尼明照のうち、永光寺に住したのは松岸旨淵、珠巌道珍、館開僧生の三名だけである。これは明峰下の基盤が脆弱であったこと、明峰の兄弟達の協議による運営がその一因と云ってよいと思うが、通幻や大徹の如き組織者、指導者が出なかったことも要因として考えられよう。

同じ輪番・輪住制をとりながら、その運営の相違はどこから出てきたのであろうか。これは重要な問題である。

明峰・峨山とその法嗣達が活躍した時代は、丁度『太平記』の世界の時代に重なる。[29]

いつはてるかもしれない戦乱をくぐりぬけた人々が、心からほしいとねがったものは平和な暮らしである。

このような太平の世界をねがう民衆の心が、戦乱の世を描いた書物に『太平記』という書名をつけたといわれている。そこに描かれる世界は、二条河原の落首に要約できる。既成の権威や価値観は根底からくつがえされ、気まま勝手が横行して、自由奔放にふるまうことを誇る、佐々木道誉に代表される「ばさら大名」が出現した。また「下剋上スル成出者」が巷間にあふれ、自由狼藉の世界が展開する。しかし、そうしたことは、人間精神の解放につながる現象であり、行動である。中世前期的世界から中世後期的世界への転換がそこにみられよう。この動乱期を生きぬくことは容易ではない。人々は戦乱のあいだをぬって茶寄合や連歌会にうさをはらし、隠逸を求めて遁世する者も多かった。しかし、卑賤に生まれた民衆は、生業にはげむしか道はなかった。そこに彼らはたくましく生きぬいたのである。

そして、具体的な日常の生活にわたって、中央権力者の側からの強い制約を受けなかったせいか、地方色豊かな生活様式や「遊び」と称する様々な様態が見られるようになった。[30]

また一世をさわがせた新造中の南禅寺楼門破却要求事件が起り、応安元（一三六八）年、二年の叡山衆徒入洛に対する幕府の対応、南禅寺定山祖禅（一一三七四）の遠州配流、この一連の動きは旧仏教の最高権威比叡山と五山最高位の南禅寺との衝突で、武将達も両派に分れて味方するという政争に発展した一例でもある。

この時代はまさに無秩序の動乱の社会であり、実力主義の競争社会であり、才人の不忠、組織の非情が横行した時代である。それだけに組織運営が因難だったのである。これは宗教集団とて例外ではない。

総持寺五院の成立は、峨山門派の結成、結束を強化した

が、一方では通幻・大徹による擯出門徒を出した。非協力的な者を排除したのである。その代表的存在が源翁であるが、これは組織の非情を如実に示した事例である。[31]

五院は当然のことながら、総持寺への忠誠心を持つ者だけで構成された。その限りでは住持位に就くことが、その門流までもが保証されたのである。これが帰属意識をより強固にした。組織に対する忠誠心ももった。これは裏を返すと五院から抜け出すことを許さない強い規制力を持ったのである。つまり造反を許さない相互規制のメカニズムが機能したのである。源翁一派に対する処遇も「見せしめ」の趣きもあるのである。永光寺にはこのようなことはなかった。これが両寺の性格を決定づけたと云って良いのである。

ただし動乱の時代の自治的宗団が組織を維持して行くには、信仰心に基づく宗団の結束が何よりも重要であり、そのためには積極的には異分子を排除し、消極的には一味同心の法系の脱落を許さぬ厳しさを持たなければ、不可能であったといえるのである。

寺格・寺院の序列が問題になるのはそのためである。師に対する呼称も、例えば『竺山得仙禅師語録』二には「立川寺開山忌香語」の中に

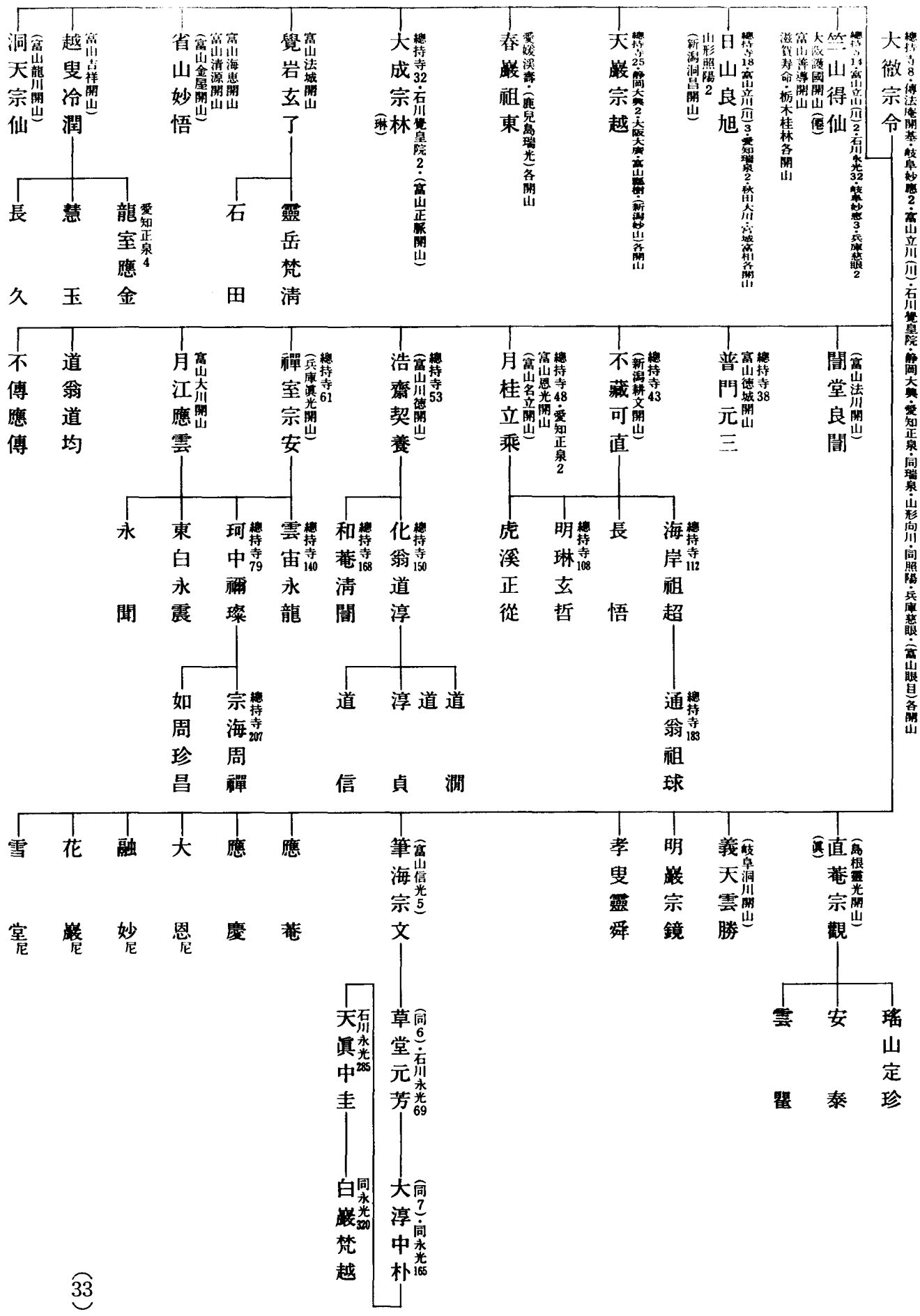
当寺開山老和尚大禅師。克家柱礎。迷津船艑。恩沢集類。履操三谷神。高明筆二日月一兮。[32]（傍点筆者）

とあって、師を「老和尚」といった例は彼が最初かどうか断じ難いが、以前には見当らない。もっとも峨山を「老師」とか「老師大和尚大禅師」と呼んだ例は『通幻禅師語録』に見られる。師をよぶのに非常な修辞的工夫をこらすようになったのは、曹洞宗では峨山門下のころからである。これは師に対する真情は当然のことであるが、組織への帰属意識、参加意欲がこういった形で現われていると見ることが出来るのである。

また永光寺が不幸にも天正（一五七三―一五九二）の兵火によって灰燼に帰し、漸次復興したが、総持寺は開創以来、明治三一（一八九八）年四月一三日に回録の災に羅るまで元亨元（一三二一）年から数えて、実に五七七年も火災に会っていないのは稀有のことである。それだけに管理運営が行き届いていた証拠であろう。

六

大徹はその門下に、竺山得仙（遷）・日山良旭（―一四二六）・天巌宗越・春岩祖東・大成宗琳・覺岩玄了・省山妙悟（―一三叟了閩・闇堂了閩・月江応雲（―一四三八）・普門元三・不蔵九一）・越可直・浩済契養・月桂立乗（一三四六―一四二六）・洞天宗仙・禅室宗安等の十六哲を打出した。竺山は摂津・近江・関東に、日山は出羽、奥州に、天巌は摂津、越後に、春


大徹宗令
總持寺8・傳法庵開基・岐阜妙應2・富山立川(川)・石川覺皇院・静岡大興・愛知正泉・同瑞泉・山形向川・同照陽・兵庫慈眼・(富山眼目)各開山
竺山得仙
總持寺14・富山立山(川)2・石川永光32・岐阜妙恵3・兵庫慈眼2
大阪護國開山(僊)
富山善導開山
滋賀寿命・栃木桂林各開山
日山良旭
總持寺18・富山立川(川)3・愛知瑞泉2・秋田大川・宮城富相各開山
山形照陽2
(新潟洞昌開山)
天巖宗越
總持寺25・静岡大興2・大阪大廣・富山瓢樹・(新潟妙山)各開山
春巖祖東
愛媛渓壽・(鹿兒島瑞光)各開山
大成宗林
(琳)
總持寺32・石川覺皇院2・(富山正脈開山)
覺岩玄了
富山法城開山
靈岳梵清
石田
省山妙悟
富山海恵開山
富山清源開山
(富山金屋開山)
越叟冷潤
富山吉祥開山
龍室應金
愛知正泉4
慧玉
長久
洞天宗仙
(富山龍川開山)
闇堂良闇
(富山法川開山)
普門元三
總持寺38
富山徳城開山
不藏可直
總持寺43
(新潟耕文開山)
海岸祖超
總持寺112
通翁祖球
總持寺183
長悟
明琳玄哲
總持寺108
虎溪正從
月桂立乘
總持寺48・愛知正泉2
富山恩光開山
(富山名立開山)
浩齋契養
總持寺53
(富山川徳開山)
化翁道淳
總持寺150
道澗
道貞
道信
和菴清闇
總持寺168
禪室宗安
總持寺61
(兵庫眞光開山)
雲宙永龍
總持寺140
珂中禰璨
總持寺79
宗海周禪
總持寺207
如周珍昌
東白永震
永聞
月江應雲
富山大川開山
道翁道均
不傳應傳
直菴宗觀
(眞)
(島根靈光開山)
瑤山定珍
安泰
雲瞿
義天雲勝
(岐阜洞川開山)
明巖宗鏡
孝叟靈舜
筆海宗文
(富山信光5)
草堂元芳
(同6)・石川永光69
大淳中朴
(同7)・同永光165
天眞中圭
石川永光285
白巖梵越
同永光320
應菴
應慶
大恩尼
融妙尼
花巖尼
雪堂尼

岩は伊豫に、月桂は越後に、それぞれ教線を拡張した。要するに大徹派の分布は越中、越後、能登、美濃、摂津、丹波、近江、伊豫、播磨、石見、尾張、三河、出羽、陸奥を主として、日本の中部以東の広範囲に亘って多少に依らず、その法燈を相続してきているのである。

さて、次に派祖大徹の思想について若干伺ってみよう。しかし残念ながら彼には著作が残っていない。わずかに先にも触れた伝記に散見できる程度である。そこで彼の弟子達の著作や伝記を通して、ある程度類推が可能ではないかと思うのである。幸い竺山には守勤編『竺山得仙語録』二巻及び『竺山大和尚行録』が存する。

竺山は二四歳（一三六八）、妙応寺に大徹を訪ねる。会下にあって、大徹が冬夜上堂に洞山良价（八〇七―八六九）の「話」を挙げて

冬夜挙下洞山高祖冬云。有二一物一。上拄レ天下拄レ地。黒如レ漆。常在二動容中一。不レ得二動容中収一。過在二什麼処一古則上。問云。如何是箇一物。師。言下忽然大悟礼拝。徹云。伱見二箇什麼道理一即礼拝。請下二取一転語一。師云。独掌不二浪鳴一。徹云。正当恁麼時作麼生。師。便擲二下坐具一。徹云。如是如是。伏膺六年。年暨二二十九一。応安五年壬子。七月二十六日。得二曹洞之密旨一。伝衣附法。摩頂既畢。(34)

と、黒漆一物の動用自在の消息を捉えて伏勤六年、印可を得たのである。

竺山は大徹に参ずる前には臨済宗永源寺派の祖寂室元光（一二九〇―一三六七）、定光寺の平心斉、下野吉祥寺の大拙祖能（一三一三―一三七七）、積翠寺の白翁雲、真如寺の不昧興志など臨済宗の禅匠に参じている。そして大徹に参じたのであるが、上記の問答によって旨を得、侍すること六年にして衣法を受け、後、摂津に護国寺を開くが、立川寺、総持寺にも住し、応永十五（一四〇八）年、正月、大徹が立川寺に寂するに及んでその後席を嗣いでいる。

竺山は将軍足利義満（一三五八―一四〇八）の帰依を受けたとあるが、これは『竺山大和尚行録』に、

仍募二畠山金吾権威一。請為二大檀那一。従一位太政大臣。天山道祐来臨。即問曰。寺号何乎。金吾云。護久。天山云。請改レ久作レ国。金吾云。多幸。名曰二護国寺一。天山云。可レ一二準諸山一。其如何。金吾以レ旨告レ師。師曰。天下都鄙名藍。皆臨済宗。夫曹洞宗者。偸二身於山林一。遁二意於名利一。若比二諸余列刹一者。失二却宗旨一。天山聴而不レ復。恭敬無レ所レ置。良久云。若然者。為レ余号二祈願所一。如二之何一。師肯レ之。(35)

とある。これは竺山が護久（国）寺の檀越、畠山金吾を通してのことである。竺山が参じた大拙祖能に対し、「将軍義満相模鎌倉円覚寺の公帖を下すに辞してつかず、大友氏公命を受けて再度これを円覚に招く。辞することあたわずして衆に

熙み旬日にして退く。のち建長寺の招聘にあずかり、使節三度に及んでこれに住す」[36]とあって、こういった大拙と義満との関係から、後、曹洞宗に転じてからも義満の竺山帰依に何らかの関連する所があったと見ることができぬであろうか。兎に角、峨山下では大徹派が臨済宗との関係が一番濃厚なのである。

さて峨山の宗旨は兼中至、兼中到とする石霜五位を根幹とする中国曹洞宗旨であり、公案を拈弄する臨済的接化法であり、密教ないし俗信仰をふくむ祈禱的要素を多分に含んでいる。つまり瑩山の路線を継承している。

峨山の『山雲海月』に引用されている話則に関連する禅者は、臨済・雲門・法眼・曹山・洞山・潙山・仰山・楊岐・玄覚・達磨・霊雲・香厳・僧璨・魯祖・南泉等である。

次に『竺山得仙禅師語録』一、二について、話則に関連する禅者は、臨済宗では、翠巌（二回）・百丈・虎丘（二回）・南泉（二回）・三聖・石鞏（二回）・趙州（四回）・雪竇・志勤・臨済（四回）であり、雪峰下で、保福・長慶・雪峰等が見られる。

雲門宗では、文偃・香林澄遠であり、曹洞宗では宏智（四回）・石頭・洞山であり、潙仰宗では、仰山・霊雲・劉鉄磨であり、青原下では徳山（五回）、薬山下に道吾・禾山等がある。

南岳下では龐蘊・黄檗・裴休（二回）・陸亘等がみえ、法眼宗は、法眼・慧超である。また肇法師も見える。

大徹自身には芭蕉慧昭・洞山良价・風穴延沼位しか見当らないので、これをもってしては何とも云えないが、彼も五家全般に亘っていると見てよいであろう。

「語」「話」については煩を避け、全体の傾向を云えば、機関に関する語、有名な公案が共に引用され、特に五家の宗派的特徴は見出せない。ただ竺山の場合、「永平密附」「非思量」（二回）、「現成公案」（二回）、「眼横鼻直」（二回）、「情非思量」等、永平下の宗旨表闡上の重要語句が用いられ、更に瑩山が用いている「覚触」が見える。また「過二十万億土一到二上品上西（生カ）二」といった浄土的な表現も見られる。

次に竺山以外の大徹の法嗣について、「伝記」を通して関係のある「語」「話」を拾ってみると、向川寺日山良旭には「五位、四借」が用いられ、耕文寺不蔵可直は、大徹が「令看瑞滴巌主人公話」と師彦の話を看せしめ、恩光寺月桂立乗は「道吾舞撃、秘魔撃レ叉」とあり、大川寺月江応雲は「牛頭未レ見二四祖一時如何、師曰、弄レ巧成レ拙、云、見後如何、師曰、瓦解氷消」とある。龍雲寺越叟了閩は「百丈巻席、秘魔撃叉」「南泉斬猫」「大隋焼絶」、真光寺禅室宗安は「師嘗於二婆子焼庵話一、頓二悟深旨一」大広寺天巌宗越は『碧巌録』十四則に関連して「参二究峰於能之定光一、峰挙レ欲レ識二仏性

義、当レ観ニ時節因縁ニ之話ヲ授レ之、峰指令レ依ニ立川大徹ニ」とあり、また「三世諸仏不レ知レ有、狸奴白牯卻知レ有」（『従容録』六九）が見え、瑞光寺春巌祖東には「読ニ伝燈ニ」「初参ニ黒川月庵ニ挙ニ即今上人性話ヲ、直去往ニ濃之妙応ニ依ニ大徹ニ偶晩参徹挙ニ臨済四賓主ヲ、問、如何是賓中主」とある。徳城寺普門元三には「達摩不レ来ニ東土ニ二祖不レ往ニ西天ニ」の語が見える。(37)

春巌祖東は臨済宗大虫宗岑の法嗣月庵宗光（一三二六―一三八九）に参じているが、月庵は曽つて瑩山から菩薩戒を受けた孤峯覚明（一二七一―一三六一）に参じ、輪鑰を司っている。月庵には『月庵仮名法語』が存するが、「示ニ宗三禅閣ニ」に『普勧坐禅儀』の語を受けた箇所があって親近性が存する。(38) 彼は美濃の生まれでもあるので、こういった点から、また孤峯覚明と峨山との交渉もあるところから、「塩山抜隊、黒川月庵等。皆腰包礼謁」（『日域洞上諸祖伝』上）と峨山に参じたのは極めて自然のことであろう。

七

さて、以上『山雲海月』と『竺山得仙語録』の中で、共通する「語」は、「偏正従レ本不レ離ニ本位ニ」「現成公案」「非心非仏」「真心」等比較的少いが見られる。しかし意味内容が共通している「語」は多く見出すことができるのである。これは竺山以外の大徹下の禅者達においても共通しているといえる。従って基本的には中国五家全般に亘っていて、この面から云って、大徹もこの範囲で考えてもよいであろう。

では次に機関について見てみよう。『山雲海月』には、「宗門之位次、五位者兼中到、兼中至、此両位専也」「正中来、前後相備、明ニ正旨正道ニ」と五位を中心にしているのは当然であるが、「君臣五位」「三玄」「四異類」「四賓主」「四料揀」「四喝」「石霜七去」等が用いられ、竺山には『宏智録』あるいは『天童小参録』等に見える「君臣五位」「正偏五位」をはじめ、「賓主互換」「賓中主主中賓」（四賓主）、四借、三路等を用いていることが分かる。大徹には、春巌祖東が大徹に参じた際「臨済四賓主」を示されたことがあり、その他一般的に機関を用いていたと見てさしつかえないであろう。

では、「五位」はどうであろうか。峨山自身及び法嗣の中でも、五哲のうち、既に太源、通幻、無端、実峰が一般的機関も当然のことながら用い、特に「五位」を宗旨拈提の中心にしていたことは明白なところであるので、ここでは触れない。ただ従来五哲の中で大徹のみ不明であり、五位の拈提がなされなかったと見られている。(39) 果してそうか問題である。

『竺山得仙語録』一に、

結夏小参、夫吾家面目、全与ニ他家ニ手段異。有時向ニ君臣上ニ。為ニ初機ニ説。有時於ニ偏正中ニ。為ニ後学ニ唱。向去兮却来。回互

不回互。応レ時而酬。(40)

と竺山自身が五位を用いて他家と異なる自負を示しており、拈提していたことが明確である。また大徹について、闇堂了閩の請に応じて「大徹和尚賛」に、

雖二色聚誠新一。惣不二如如身一。筆下無二私処一。端的是真人。(41)

と師大徹を賛えているが、更に竺山は、

恭惟。当寺開山大徹大和尚禅師。両回挑二永光輝燭一。三度登二諸岳山巓一。賢徳播二千里一。価声重二一天一。遠汲二曹渓深淵流水一。近続二大白功位密伝一。行棒行喝、則向二干戈裏一。立二太平基一。(42)

と、師に対する帰敬の念の厚いことが伺えるが、更に大徹は棒喝を行じ、学人をしてよく葛藤を断じて安心の道に至らしめているといゝ、そして竺山は続けて、

有時行二三路一。而路中無二去就一。有時翫二五位一。而位裏絶二来由一。可レ謂。転轆轆倒レ岳。活鱍鱍傾レ湫。(43)（傍点筆者）

と、大徹も「三路」と共に「五位」を学人接化の手段として、拈弄していたことが明らかである。

以上見てきた如く大徹の立場は峨山を継承するものであることが分かるが、その引用典籍として、明らかに知れるのは、わずかに『碧巌録』『無門関』ぐらいであるが、峨山・竺山を含めて、引用典籍を拾ってみれば、『広燈録』『雲門録』『五燈会元』『無門関』『碧巌録』『趙州録』『宏智広録』『洞山録』『臨済録』『道樹録』『永平広録』『六祖壇経』『信心銘』『大般涅槃経』『肇論』『証道歌』等である。永平『正法眼蔵』はじめ道元の著作はほとんど引用されていないが、わずかに前掲のいくつかの「語」に伺うことが出来る程度である。

こういった点からすれば、これらの諸師の宗旨表闡は日本曹洞禅というよりは、中国曹洞禅に近いというべきであろう。しかし永平門下の自覚は堅持していたことは理解できるのである。

しかしまた次に中国禅に見ることの出来ない日本的特徴として、二点があげられる。それは「密儀」が積極的に取り入れられていることと、それに関連して「写経」が行われるようになったことである。例えば『竺山得仙語録』には、『首楞厳呪』『秘密神呪』『諸尊神呪』『秘密仏陀羅呪』等真言陀羅尼を度々読誦したことが明確であり、「楞厳一会」あるいは「首楞厳一会」が行修せられていたことが分かる。瑩山以来の密教及び密儀摂取が定着してきた感がある。

そして更に『竺山得仙語録』二に多く見られる「拈香法語」類に、「書二写五部大乗経一」「写法華経」「写妙法蓮華経」「漸写二大乗妙典数部一」「頓写二大乗妙経一」「頓写二一部蓮華王一」「書二写無上妙文一部八巻一」（『法華経』）とあって、薦亡供養の儀礼の一環として「写経」が盛んに行われていることである。その経典も『法華経』が多いようであるが、こうい

った風儀が大体この時期即ち十四世紀末頃から十五世紀にかけて有縁の人々が薦亡供養の写経を行うようになったものと思われる。

以上大徹の思想的立場を見てきたが、その周辺からたどって行くという形しかとれない所に限界があり、靴下掻痒の感なしとしない。が又全般の傾向として『宏智録』引用が目立つが、これは永平義雲（一二五三―一三三三）にも見られる所である。瑩山下においても共通の現象と見ることができる。特に宏智派の来朝僧東明慧日（一二七二―一三四〇）及び東陵永興（―一三六五）の影響も少しはあると見てもよいのではなかろうか。特に東明派の彼の弟子別源円旨（一二九四―一三六四）が康永元（一三四二）年朝倉広景の招きで越前の足羽の弘祥寺を開き、また善応寺・吉祥寺を開創し、[44] 北越を中心に教線を伸張してきたことと無関係には思えないのである。

また臨済禅者の語録の引用についていえば、虚丘紹隆（一〇七七―一一三六）の語が目につくが、大慧宗杲（一〇八九―一一六三）は見当らない。虚丘紹隆の法系に属する松源派の蘭渓道隆（一二一三―一二七八）、特に虚堂智愚（一一八五―一二六九）の法嗣南浦紹明（一二三五―一三〇八）・宗峰妙超（一二八二―一三三七）・関山慧玄（一二七七―一三六〇）の応灯関の流れ、また大休正念（一二三五―一二八九）、無象静照（一二三四―一三〇六）、西磵子曇（一二四九―一三〇六）、明極楚俊（一二六二―一三三六）、愚中周及（一三二三―一四〇九）・竺仙梵僊（一二九二―一三四八）、月林道皎（一二九三―一三五一）など来朝・帰朝僧による活躍で、その盛行ぶりと関係があると見てよいのではないかと思う。

大徹は応永十五（一四〇八）年（一説には十二年、一四〇五）正月二十五日、立川寺に寂し、塔を獅子庵、寿七六歳、遺偈は、

生死無常人不レ識。従前仏祖不レ能レ及。頭長三尺更是誰。万仞峯頭独足立。[45]

である。生死に処して何ものにも捉われざる越格の志気と自在の働きを示している。

その独立不羈の精神は単に自己満足を維持する孤高に身を置くことに止まっていない。十六人の法嗣を始めとする多数の帰依者受戒者を有する点においては、無外円昭（一三一一―一三八一）の如き隠逸的な生き方をとっていない。さりとて安易な体制順応に終始することなく、しかも協調的な態度を持ちつつ教祖的な独自の世界を截り開いてきたのである。

八

通幻寂霊が、その禅、文学、政治に通じ、行くところ可ならざるなき絢爛さを示しているので、その影にかくれ勝ちであるが、通幻と共に五院制度の確立者として、また竺山得仙

の如き出藍の英傑や日山良旭を打出することによって、かえって真実の姿が浮かび上ってくるのである。

五院の伝法庵の他に、塔頭覚皇院を開創し五院制度を補強せしめた運営手腕には見るべきものがあり、その隠密堅実な家風は、峨山下にあって一段と重さを加えて行ったのである。

やがては自派塔頭に源翁派を受け容れるようになるのであるが、当初はその門流はたしかな足どりで歴史に伸張していったのである。

註

(1) 「総持寺五院輪住制度考」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四十六号。

(2) 普済善救の「祭文」では、大徹の没年は応永十二(一四〇五)年としている。実峰良秀の没年(一四〇五)と同年ということになるが、峨山の直嗣者としては最後まで生存した人としては一人ではないことになる。

(3) 『本朝高僧伝』三六、五〇八頁。

(4) 『曹洞宗全書』史伝、四八頁。

(5) 「続日域洞上諸祖伝」二『曹洞宗全書』史伝、一三〇頁。

(6) 「妙応寺文書」『曹洞宗古文書』下、一七三八号、応永二九(一四二二)年三月九日付。

(7) 「日本洞上聯燈録」『曹洞宗全書』史伝二、二五九頁。

(8) 『三田史』上巻、六六三頁。

(9) 『曹洞宗全書』史伝上、二六三頁。

(10) 拙稿「総持寺五院輪住制度考」参照。

(11) **元五院輪番地の地区別一覧表**

県名＼五院	普蔵院(一〇七ケ寺)	妙高庵(八六ケ寺)	洞川庵(五一ケ寺)	伝法庵(四九ケ寺)	如意庵(五八ケ寺)	計
青森		二				二
岩手	一		七			八
宮城	三	一	七	二		一三
秋田	一		八	二	二	一三
山形	四		一〇	八	二	二四
福島	九	一	二	二		一四
茨城	一	三	一			五
栃木		二		一		三
群馬		四				四
埼玉	一	二	一			四
千葉	一		七			八
東京				一		一
神奈川	三					三
新潟	一三	三		一	二	一九
富山		四	一	四	一	一〇
石川	六	一〇	四	二	九	三一
福井		九			二	一一
山梨			一			一
長野	四	八		一	四	一七
岐阜	二	二				四
静岡	三七	二		六		四五
愛知	九	一三		六	一八	四五

三重	一	二			三	六
滋賀	一	一		一		三
京都	二	二				四
大阪		一		五	一	七
兵庫		五		三		八
奈良	三					三
和歌山	一					一
鳥取		二		一	二	五
島根	一	一	二		一	五
岡山	一			一	三	五
広島					一	一
山口		三				三
愛媛				一		一
福岡		一			一	二
佐賀					二	二
熊本		一				一
大分	一				一	二
宮崎					（廃寺 三）	三
鹿児島	（廃寺 一）一	（廃寺 一）		（廃寺 一）		四
合計	一〇七	八六	五一	四九	五八	三五一

(12) 中島仁道『曹洞教団の形成とその発展』二〇頁。

(13) 江戸時代は格式を重んじたので、例としては適切ではないが、勅使饗応には元禄末期の頃には、わずか数十人の一行を四、五日もてなすだけに大名は一〇〇〇両近い費用がかかったという。本山晋住の場合は、人件費の占める割合は少いかも知れないが、儀式・常住の資が多く必要になったのである。

(14) 拙稿「中世曹洞宗と羅漢信仰」『印度学仏教学研究』三七・一、二三二―三八頁。

(15) 島崎敏樹『感情の世界』（岩波書店）参照。

(16) 栗山泰音『嶽山史論』四〇五頁。

(17) 「総持寺未来住持職事」（総持寺蔵）

(18) 「総持寺山門住持職事」（総持寺蔵）

(19) 塔頭を構え、本山を維持するには相当の資金調達が必要となる。これが可能な人が結果的には応ずるようになったものと考えるべきである。もう一つは地理的な条件も重要であるが、この点については拙稿「総持寺五院制度成立考」（『仏教学部研究紀要』四十六号、六二―三頁）参照。

(20) 『通幻寂霊禅師全集』（永沢寺刊）

(21) 永原慶二『日本中世社会構造の研究』三七五頁参照。

(22) 「総持寺山門住持職事」（総持寺蔵）

(23) 拙稿「総持寺五院輪住制度考」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』四六号、参照。

(24) 栗山前掲書参照。

(25) 田島柏堂『総持二祖峨山韶碩禅師』参照。

(26) 「南閻浮提大日本国摂州吹田庄。牛頭山護国禅寺。住持等五十七世法孫嗣比丘得仙等。恭惟。当寺開山大徹大和尚禅師。両回挑二永光輝燭一。三度登二諸岳山巓一。」（「竺山得仙語録」二『続曹洞宗全書』語録一、二七頁。）

(27) 「異本如二次文一」「自二加州大乗寺一御申候。四門跡之諸寺庵寺位之次第竝東堂位之事。大乗寺方訴訟。為二理運至極一之上者家訓之可レ被レ任二先規一之旨。当門下可レ被レ触レ申者也。仍状如レ件」（『常済大師全集』四六二頁）

(28) 『曹洞宗全書』宗源・下。

(29) 『岩波古典文学大系』「太平記」参照。

(30) 横井清『中世民衆の生活文化』一四三頁以下参照。
(31) 栗山前掲書、中島仁道『通幻禅師の研究』、拙稿、前掲論文参照。
(32) 『続曹洞宗全書』語録一、二七頁。「先師大徹大和尚拈香於二桂林寺一」に「護国開山先師大徹尊老大和尚大禅師」(傍点筆者、『続曹洞宗全書』語録一、四三頁)とある。
(33) 「曹洞宗大系譜」(二)『曹洞宗全書』九六五頁。
(34) 「竺山大和尚行録」『続曹洞宗全書』史伝・五四八頁。
(35) 右同、五四八頁。
(36) 『延宝伝燈録』六、『本朝高僧伝』三三参照。
(37) 『曹洞宗全書』史伝、「日本洞上聯燈録」三。
(38) 拙稿「中世における洞済交渉の一側面」『駒沢大学仏教学部研究紀要』三四号、一〇二頁参照。
(39) 榑林皓堂『道元禅の本流』三〇六頁。
(40) 『続曹洞宗全書』語録一、一一頁。
(41) 「竺山得仙語録」一、『続曹洞宗全書』語録一、一七頁。
(42) 「竺山得仙語録」二、『続曹洞宗全書』語録一、二七頁。
(43) 右同、二七頁。
(44) 詳しくは、今枝愛真『中世禅宗史の研究』「曹洞宗宏智派の発展と朝倉氏」参照。
(45) 「日本洞上聯燈録」二、『曹洞宗全書』史伝、七三頁。